体外受精を繰り返した後に、ウチダの八味丸Mを服用して自然妊娠に至った2症例

入江漢方内科クリニック吉祥寺（東京都）　入江 祥史

わが国の女性の第1子出産年齢は、人工授精などの技術面の発達により高齢出産が可能となったことで年々上昇しており、医学的には母体への負担がより増している。漢方医学的には、自然妊娠をしにくい状態であっても妊娠が可能になっているということであり、これに応えるには補腎が大切である。代表的な補腎の処方である八味丸を用いて自然妊娠に至った例を紹介する。

Keywords　八味丸、腎虚、不妊症、自然妊娠

緒　言

わが国の女性の第1子出産時の年齢は、年々上昇している。厚生労働省によれば、昭和50（1975）年には25.7歳だったのが、平成7（1995）年には29.1歳、平成25（2013）年には30歳を超え、最新の平成28（2016）年のデータでは30.7歳となっている[1)]。ここ40年の間に5歳も上昇している。

その原因はおもに社会的なものではあるが、人工授精や体外受精、顕微授精などの技術面における発達により、高齢での出産を可能としていることもまた、大きな後押しとなっているはずである。結果として高齢での出産がますます増え、医学的には母体への負担がより増している。この状況を漢方医学的に見れば、腎の機能が衰えはじめ、自然には妊娠しにくい状態であっても何とか妊娠させることが可能な時代となっているということなので、これに応えるには腎の力を補うことが大切である。

補腎の漢方処方にはいくつかあるが、八味丸が代表的なものである。これまでにも筆者はこの処方を用いて不妊症の治療にあたってきたが、主に体外受精の補助として用いてきた。今回は、体外受精を繰り返して不成功に終わった女性に八味丸を用いて、結果的に自然妊娠に至った例を紹介し、八味丸の補腎力を再確認してみたい。

症例 1　38歳、女性

結婚以来不妊である。31歳時に婦人科的精査を受けたが、とくに異常を認めなかったため、漢方治療を開始した。33歳時より人工授精、体外受精を併用してきた。体外受精を5回実施したが、受精卵はできるものの着床には至らない。身体的にも経済的にもきついため、これ以上の保険外治療を中止し、X－1年5月から漢方治療に絞った。X年4月当方を受診した。なお、夫は健康である。

これまでに服用した漢方薬は、婦宝当帰膠、当帰芍薬散、当帰四逆加呉茱萸生姜湯などであった。現在は、婦人科にて温経湯をX－1年9月から処方されて服用している。

【初診時現症】　身長166cm、体重60kg。色白で皮膚や筋肉は軟弱である。表情はやや元気がない。

疲れやすい。気力がない。物忘れが多い。集中力がない。寝つきが悪い。眠りが浅い。寝起きが悪い。食後すぐ眠くなる。

尿：1日4～5回、夜間尿1回。便：1行/日。食欲は普通～旺盛であるが、胃もたれしやすい。足腰が冷える。腰痛（＋）。手先が冷える。風邪をひきやすい。肩こり（＋）。目が疲れる・めまい（＋）。立ちくらみ（＋）。耳鳴（＋）。下腹が張る。足がむくむ。月経不順（＋）。月経周期：45～60日、出血3日。出血量少。月経痛軽度。基礎体温：二相性。低温期36.0～36.2℃、高温期36.4～36.6℃。

【東洋医学的所見】　脈：沈細虚。とくに尺中は触れない。

舌：淡紅、薄白苔（＋）。胖大・歯圧痕（＋）。舌下静脈怒張（＋）。

腹：心下痞（＋）。腹部動悸を臍下に触れる。少腹不仁（＋＋）。少腹拘急（＋）。

【東洋医学的診断】　脾気虚＋腎陰陽両虚。

【治　療】　補脾化痰、補腎陰陽。

【処　方】　六君子湯＋八味丸

【経　過】　六君子湯3包は分3毎食前にて、ウチダの八味丸M60丸は分3にて、脾胃が虚弱なので食後指示で服用を開始した。

その後、月経が32日、29日で到来し、基礎体温も低温

期36.3℃、高温期36.8℃と上昇したため、自然妊娠も可能かもしれないと判断した。

X年6月に妊娠反応陽性となった。八味丸を中止し、六君子湯3包＋ケイヒ末3.0gとして継続投与した。翌年無事出産した。

症例 2　44歳、女性

38歳時に結婚以来、不妊である。婦人科的精査では異常を認めなかったが、AMH（抗ミュラー管ホルモン）が0.16ng/mLと少なく、さらに夫の精子数が少ないことと、高齢結婚ということもあり、人工授精、体外受精に踏み切った。体外受精を7回施行したが受精卵はできるものの着床には至らないため、漢方治療を希望して、X年6月、当方を受診した。

【初診時現症】　身長156cm、体重44kg。色黒で華奢である。表情はやや元気がない。

疲れやすい。気力がない。物忘れ（＋）。イライラ（＋）。寝つきが悪い。眠りが浅い。朝早く目が覚めてしまう。下痢しやすい。尿：1日8～10回。食欲はあまりなく、塩味が濃いほうだという。口渇がする。寒がりで足腰が冷える。腰痛（＋）。顔はほてることが多い。肩こり（＋）。頭痛（＋）。目が疲れる・足がむくむ。

月経順・周期35日・出血 5日。出血量少。月経痛は軽度。基礎体温：二相性。低温期35.8～36.2℃、高温期36.2～36.4℃。

【東洋医学的所見】　脈：沈細虚、数。

舌：淡紅、薄白苔（＋）。胖大・歯圧痕（＋）。舌下静脈怒張（＋）。

腹：腹部冷感著明。腹部動悸を臍下に触れる。少腹不仁（＋）。少腹拘急（＋）。

【東洋医学的診断】　脾陽虚＋腎陰陽両虚。

【治　療】　補脾陽、補腎陰陽。

【処　方】　人参湯＋八味丸

【経　過】　人参湯3包は分3毎食前にて、ウチダの八味丸M60丸は分3にて、脾胃が虚弱なので食後指示で服用を開始した。

1ヵ月後、基礎体温は低温期36.1～36.2℃、高温期36.3～36.5℃と若干上昇したがまだ不十分と判断し、三和加工ブシ末1.5g毎食前分3を追加した。

さらに1ヵ月後、基礎体温は低温期36.4～36.5℃、高温期36.6～36.9℃と上昇したため、この処方を継続した。

X年10月、体外受精の休止期間中に自然妊娠したため、八味丸を中止し、人参湯3包として継続投与し、翌年無事出産した。

考　察

そもそも腎とは、『黄帝内経』上古天真論篇第一[2]にあるように「四七筋骨堅、髪長極、身体盛壮。五七陽明脈衰、面始焦、髪始墮。」と、28歳で最盛期を迎え、35歳では衰え始めるものである。現代人の腎がとくに強くなっているとは考えられないため、これにならうとすると、現状の出産（妊娠）年齢の上昇は、明らかに腎にとっては厳しい状況である。何らかの対策が採られてしかるべきであり、漢方治療もそのひとつであろうと、拙い経験からも確信している次第である。

本稿で紹介したいずれの症例も、体外受精を繰り返しても成功せず、漢方治療を導入後に比較的速やかに妊娠に至ったものである。基礎体温が低く、足腰冷えもあり腎陽虚と捉えられ、問診のみからでも八味丸が適切であろうと判断できた。しかも脈証が沈で、腹診にて少腹不仁、少腹拘急が明らかであり、最終的に腎虚（腎陰陽両虚）と診断して八味丸を選択するのは比較的容易であった。

八味丸は別名「腎気丸」といわれるように、腎に作用する処方である[3]。六味丸部分が腎陰を、追加されている附子・肉桂が腎陽を、それぞれ補う作用がある。まさに腎陰陽ともに虚している現代の挙児希望女性にはうってつけの処方であるといえる[4]。

しかし、地黄がもつ粘膩な性質は、よく胃もたれや食思不振を引き起こすため、これが原因で服薬を止めてしまう残念なケースが少なくない。もとより茯苓や肉桂がその対策として配合されてはいるものの、事実はそうである。この弊害を回避するため、補脾和胃の薬を併用するのがよい。ここに挙げた2例は、脾虚がもともとあったために六君子湯・人参湯という「おなかによい」処方をたまたま併用していたため、結果的に地黄の弊害を受けずに済んだが、平素は地黄の粘膩性をもっと意識して治療にあたっている。

結　語

八味丸で腎の作用を補い、生殖機能を高め、自然妊娠に至った、まさに定石どおりに処方することで効果を得られた2症例である。

〔参考文献〕

1) 平成28年人口動態統計月報年計（概数）の概況. 厚生労働省. http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai16/dl/kekka.pdf
2) 田代 華 整理. 黄帝内経素問. 人民衛生出版社. 北京. 2005
3) 日本漢方協会学術部編. 傷寒雑病論（三訂版）. 市川. 2000
4) 志馬千佳 ほか: アンチエイジングを目的とする‘八味地黄丸’により妊娠に至った難治性不妊50症例の検討. 産婦人科漢方研究のあゆみ 25, 99-105, 2008